

大津皇子の謎

青木 康廣(真美ヶ丘)

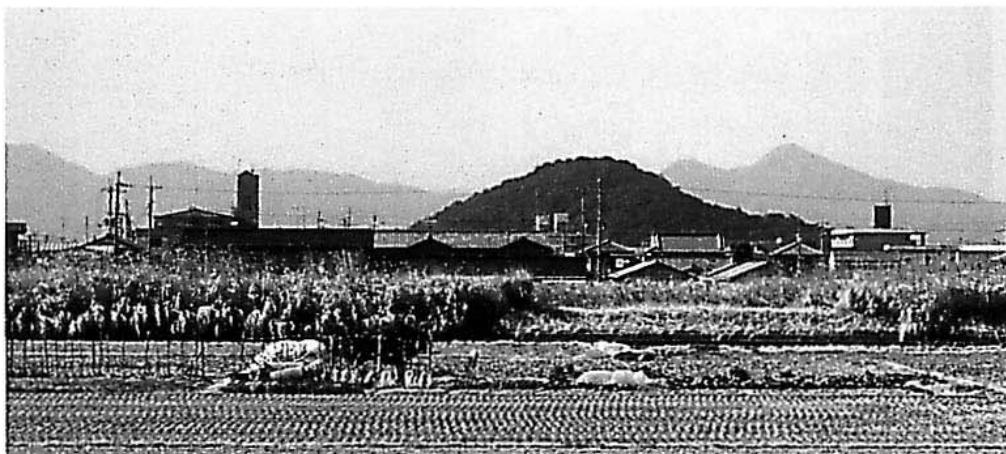
葛城山系の北端に、見る人の心に、一際ピリオドを打つように聳えている二つの峰、それが二上山です。往時、大和と河内の国境として、又現世と浄土の境界として、古代より人々の心を魅了しました。

この、二つの峰から大きく裾野をせり出す秀麗な姿は、飛鳥人が後世にいわれる「西方浄土」の山として崇め、親しんだことが納得させられます。その二上山と、山頂に眠る悲劇の皇子、大津皇子に関わる、ひとときの謎を追ってみましょう。

一、大津皇子の処刑

「日本書紀」巻二十九の天武紀では、朱鳥元(六八六)年九月九日、天武天皇が崩じ、鷦^シ野皇后が天皇に代わり政務を執ります。巻三〇持統紀、冬十月一日、皇子大津の謀反が発覚、皇子大津、他三〇名を逮捕します。翌三日、皇子大津、訖語田(桜井市戒重か)の舎で賜死しています。とにかく年二四、妃の皇女山辺は、髪を振り乱し裸足で走っていき、後を追つて死んだとあります。

死は刑死、川島皇子が、謀反のよしを



二上山の遠望(訖語田あたりから筆者撮影)

朝廷に密告して、直ちに処刑されたといふことは、疑う余地のない事実でしょう。しかし大津皇子に、謀反の意志があつたかどうかは甚だ疑わしく、鷦^シ野皇后側が、皇位継承の転機に際し、我が子、草壁皇子を推すが故の陰謀であつたとする見方が強くあります。

二、埋葬そして移葬

生前の大津皇子について、「懷風藻」によると、「容止端岸しく、音辭俊朗なり」と記されるよう、美貌の持ち主で、文武に優れ、礼節を重んじたとされています。その大津皇子が、刑死されるとやがて馬来田の池の畔に葬られ、密やかな墓がつくられたとあります。

人望厚き故、優れた人柄に惹かれていた人達は、宮廷の人目を避け、又宮廷内の者達も、鷦^シ野皇后に隠れるように、墓に詣でたとされています。

また、この年はどうしたことか、時期外れの夜の雷が轟き、閃く光は妖しい尾を曳いて馬来田の墓地に消え、墓からは怨霊の鬼火が燃えると、風間が絶えないとされました。そういう囁きのもと、鷦^シ野皇后の命により大津皇子の墓を、馬来田から二上山に移されたといいます。事實、「万葉集」においても、二上山への移葬は間違いないものです。

以上の事柄を、羅列したがどれをとっても謎深く、証明するものはなにもありません。

謎を追つて、最後に私は二上山、大津皇子の陵墓に立つてみました。

遠景に飛鳥が見渡せる、石柱に囲われた小高い雜木林、その陵墓に号く風の音、頂は哀しみに充ちています。悲劇の皇子、大津皇子が永遠に眠る「ふたかみ山」は、今もなお人の心を揺り動かさずにはいられません。

(1) 幼くして母を失い、大来皇后(大津の姉)と大津が、一人して育った訖語田の館より日の沈む二上山を眺め、母を慕う懐いに駆られ、その二上山の山景から、姉弟の寄添う姿をつくる大来皇后の、強い望みによるものであったのではないでしょか。

三、二上山への道

さて、その移葬の地として何故、二上山を選んだのかが、大きな謎であります。が、或説、又考えられる理由を挙げてみましょう。